常陸大宮市 文書館だより

～開館１周年記念シンポジウムを開催～

文書館は、平成26年10月10日の開館から１周年を迎えました。これを記念して、11月29日に「開館１周年記念シンポジウム・上廣歴史文化フォーラム 戦後70年の記憶をつなぐ―文書館所蔵史料が語る戦争と市民生活―」を緒川総合センターで開催し、歴史アーカイブズ学、歴史学が専門の３人の講師をお招きしました。

◀講師の先生方

＜講演＞

「目から鱗が落ちる地域アーカイブスを楽しむ」
国文学研究資料館名誉教授　高橋実 氏

「村役場の公文書にみる戦争の終結
－八里村と玉川村の事例を中心に－」
筑波大学図書館情報メディア系教授　白井哲哉 氏

「アジア・太平洋戦争と常陸大宮
－八里村役場文書から見えてくるもの－」
茨城大学人文学部准教授　佐々木啓 氏

高橋実先生からは、地域にアーカイブズ（文書館）ができたことの意味と、海外も含めた文書館設置の現状などについてお話しがありました。「アーカイブズ」には施設（館）を表す場合と史料群（記録史料）を指す場合があります。日本では、施設としての整備は海外に遅れをとっているものの、史料群としてのアーカイブズは、江戸から明治にかけての膨大な古文書群が存在しています。「地域に残る史料に直接触れられる文書館を利用して、先人との対話を楽しむ」という文書館の意義についてのお話しがありました。

白井哲哉先生からは、村長や助役の交代時に作成された、村有財産や文書などを列記した台帳「引継目録」からわかる、昭和20年の敗戦の前後に失われた文書と残された文書についてのお話しがありました。よく知られているように、本市域でもポツダム宣言受諾直後の国（地方事務所）からの通達により、機密文書にあたる兵事関係資料の多くが失われている一方で、召集令状の交付順序やその受領証など、文書の表題から推測できる意外な史料の存在も明らかになりました。原本が失われているためわからないと思われがちな戦時下資料について、新たな研究視角を提示したものでした。

佐々木啓先生の講演は、太平洋戦争で八里村（旧緒川村）の人々が直面した様々な形での戦争についてのお話しでした。

▲八里村の史料を使った説明

八里村出身の兵士たちは、満洲を中心に大陸や南方の戦地に送られ、戦争末期には丙種合格者などの中高年層や、健康状態の万全でない者も召集されていきました。前線の兵士だけでなく「銃後」に残った人々も、「総力戦」の推進により、徴用労働、供出、疎開、貯蓄運動などの形で協力を強いられました。軍属（軍務に就く民間人）として戦地での仕事に従事する者の中には女性も多く含まれ、国内の基地や軍の関係施設だけでなく、ニューギニアやフィリピンなど海外の戦地に送られる者もありました。地元の公文書から八里村という身近な人々の戦時中の様子がよくわかる講演でした。

その後、３人の講師をパネリストに迎え「地域史料としての戦争資料」というテーマでパネルディスカッションを行いました。市内の役場文書の中でも、特に八里村役場文書がよく残されていたことについて「敗戦の混乱で、機密文書廃棄が行われなかった可能性もある」、「敗戦時の文書廃棄に際しても、当時使用中だった文書は残された。戦後、文書管理を行った役場の判断で残されたと考えられる」、「昭和31年の合併でも捨てられることなく、様々な所蔵機関を経て残されたことの意義は大きい」と指摘がありました。

▲来場者とのディスカッション

来場者からも貴重なご意見が寄せられました。

公文書からわかる70年前の戦争について、ぜひ文書館の史料でご覧ください。

文書館　☎52-0571